

目的 私達は、昭和41年に正常中学生と非行中学生の親子関係の比較調査を実施しその後、共働き家庭とその他の家庭について親子関係の比較調査を行った。昭和48年にはこの両面にわたって調査し、親子関係を更に究明しようと試みた。

方法 調査有効対象は、山口市山口大学付属中学校と、美祿市立中学校の2校2学年生徒男女計155名とその父母、及び山口県立育成学校中学生と家庭裁判所係属中の中学生男女計48名とその父母である。これらに依頼して、田研式親子関係診断テスト、及び親子関係に関する意識調査(調査者作成)を実施した。

結果 親子関係診断テストの結果を、正常群と非行群にわけて比較すると、10の側面すべてにおいて非行群の方が親子関係がうまくいっていないことが認められ、検定の結果、両群は危険地帯、安全地帯共に0.1%の危険率で有意差が認められた。又各側面における両群家庭のズレについて順位をつけると、不安型(56.1%)、不一致型(39.1%)、溺愛型(35.8%)等が目立ち、厳格型(5.5%)、積極的拒否型(8.6%)はズレが小さい。これは昭和41年調査と0.8の相関がみられ、不一致、矛盾、不安、溺愛等が少年を非行に走らせる重大要因であることを更に確認することが出来た。次に家事専業家庭と共働き家庭を比較すると、危険地帯においては0.1%、安全地帯においては1%の危険率で有意差が認められ、家事専業家庭が共働き家庭よりも親子関係が良好であることがわかった。意識調査においては、特に親子の対話、子供への理解度、生き甲斐観、父母の理想像などに問題が認められた。